
ONE FOR ALL

田沢舞矛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE FOR ALL

【Zコード】

Z1549Y

【作者名】

田沢舞矛

【あらすじ】

いろいろな馴文を載せていくつもりです

警視庁中心キャラです

主に高佐でいきます

大抵は舞矛が担当します＊＊理江の場合はリクがあればの担当とな

ります

廬の中の美和（佐藤+西本）（前書き）

がりくつです！

廬の中の美和（佐藤 + 富本）

佐藤さん！…佐藤さん…

あの日私はどうなったのか

「捜査一課の刑事なら起きなさいよ」

お母さん泣かないで

「行かないで…・・・一人にしないで」

「僕、まだ貴女に伝えたい事があるんですよ」

一人で話さないでよ・・・

あの日私は米花サンプラザホテルの化粧室で撃たれた

意識は微かにあつた。・・・

でも起きられない

声が聞こえる・・・

「泣いてる」声が・・・・・

「美和子のバカア 気を付けなさいよ！自分の身は自分で守れっていつも言つてるのは美和子でしょ・・・」

由美の声

「蘭さんを守つてくれたのは有り難いがお母さんを困らせないであげて下さいよ・・・」

白鳥くんも・・・

『白鳥一トロピカルマリンワンドだ!! 風戸が拳銃を・・・・』

そうよ風戸が犯人なのよ

「高木くん、美和子が心配なのは分かるけど事件よ終止符切れるかもしれないのよ」

「でも……」

「高木のバカ！ 美和子なら大丈夫よ早く行きなさい！－！－！」

「／＼＼わかりました。由美さん、佐藤さんのコトお願いします」

•
•
•
■
■
■

「美和子ーもう終止符切るから早く起きてよね…」

由美・・・目の下の隈、でかいんだろうな・・・

あれからもう1ヶ月か…

声も涙も汗一つでない

私の体は機械に占領されてるだけ…このマスクも私に無理矢理
空気を吸わせ吐かせてるだけ…

「美…和子…」

「…-…-…-…-…-」

「…-…-…-…-」

「由…いなかな…」

声がでた

「由美ー泣かないで」

「美和子…！」

「犯人は風戸…米花サンプラザホテルにあつたビニール傘をみて…
・」

「美和子…お母さん…美和子が…」

「美和子…！」

「久しぶり…？」

「お医者さん！…目を覚ました～美和子が…」

「もう大丈夫です」

「事件は？」

「今解決したわ…蘭ちゃんも記憶取り戻したから…」

「良かつ…寝ていい？明日また報告…ウグッ…！」

「1ヶ月寝たんだから大丈夫よね～」

「由美、寝てないの？」

「もー誰のせいだと思っているのよ～」

「あハハ…ゴメン」

2ヶ月後

風戸先生は「無期懲役」と裁判で下された

「美和子～いつ退院？」

「2週間後よ」

「…あの時殉職してたら警視総監くらいには…」

「鶴町たりなコア言わないでよ」

松田くんを越えることはできる。でも父を越えることはムリ。だから生きている内に越えたい
高木くんに抜かされたくはないけど

「今回のつてコナンくんのお手柄？」

「いやー蘭ちゃんかと…」

「一人か…」

「美和子?」

「一人とも刑事にならないかしら」

「クラブのやつじゃないんだから」

「いいのいいの」

「もー」

夏（高木×佐藤）（前書き）

季節ハズレの為、寒いかも・・・」ア承下さる

夏（高木×佐藤）

「涉ぐーん早く早くーーー。」

減るものじゃない

そこに言ひてゐるのに彼女のほしゃ、あつぱつこは驚嘆

「確かに減るもんじやあないけど時間は確かに減るわよ」

今、僕たちは海にきてこる

彼女に

「退院したら何処に行きたい?」

つて聞いたら

「海」

と短く言われたので彼女の非番の日・・・今日、海水浴場にやつて
来た

「彼女一人?」

「「はつ?」「

「俺たちと一緒に楽しむことしない?」

「あつあつ〜彼女は渡しませんよ

「一人なわけないじゃない。確かに渉くんは影薄いけどこんなに近かつたら見えるでしょ？」

・・・・・佐藤さんある意味酷いですね//

「二の人達なんか見覚えないですか？」

「あー私も今、そこにひかかってて」

「探つて見ますか？」

「勿論よ」

力強い瞳・・・

本当に彼女は1ヶ月間意識がなかつた怪我人なのか・・・

「渉くんはケツテとチャジュウを」

ケツテ

警察手帳といえば犯人などマル秘人物にバレるため適当に訳した内の一つ

チャジュウ

チャカと拳銃を混ぜたもの
同じく訳した内の一つ

「了解」

「私はカフエ「ハネヤスメ」に誘つて居るから」

「わかりました。気をつけて下さいね」

「わかったわ」

佐藤

「ねえねえ、カフェ「ハネヤスメ」に行かない？喉渴いちゃって」

「おおいいねえ俺達も丁度昼も食つてねえし喉も渴いててよお

「じゃあ行こ」

高木

佐藤さん大丈夫かなあ

・・・警察手帳は鞄のポッケの一番目・・・拳銃はそこそこ・・・

手錠は・・・あつたあつた
三番目のポッケか・・・

佐藤

「職業なにやつてるのかしら？」

「あつ俺つか？俺は洋裁店の看板で手芸を…」

洋裁・・・手芸・・・

あつ今回の「高速道路パークイングエリア強盗事件」の・・・

確か年齢は・・・

「年齢つて24歳?」

「す」「すすね・・・ビン」「す

「ゴメンね」「ともビンゴよ

「佐藤さん、後ろにいますから」

後ろを見ると高木くん...

右を見ると白鳥くん

前を見ると高野さん...

なんで?

「今回の高速道路の手配の犯人で間違いないわよ

」

「ええ」

「私がを背負い投げするから高木くんは手錠を

「了解しました」

「・・・貴方、指名手配中の近藤英介で間違いないわね」

「へつ？」

近藤の体が宙に舞つ

「近藤英介！－逮捕する－！」

13時11分近藤英介は逮捕された

「お手柄だつたよ佐藤さん、高木くん」

「ハハハ・・・」

「高木くん、後で取調室に」

その日の取り調べは5時間に及んだとさ

END

夏（高木×佐藤）（後書き）

高野さん、白鳥さんがいた＝「テートの張り込み

つて言つても私の中では佐藤、高木は東都タワーのあの時からの付き合つて事なのでまだテートぢやあナイツス・・・

分かりにくくてスミマセン

117 (高木 + 佐藤 + 飯本 + 千葉) (前書き)

早じりしてみた

「・・・美和子?」

「あつえーつ・・・由美...」

「もーなに考えてたのよ」

「うん...ちょっとね」

「11月7日か・・・」

11月7日、松田くんの命日

「去年やつと逮捕されたんだよね〜」

「・・・そうね」

松田くんは3年前殉職した

去年高木くんは死神に連れていかれそうになつた

「私つてやつぱり死神なのかなー」

「・・・ふつ!!--アハハハハハ!!--」こんなに美人な死神が居たら
逆に見てみたいわ~ヒヒヒ」

「ちょっとそんなに笑わないでよ~てか美人つて・・・由美の方が断
然綺麗で可愛いって」

「死神……アハハ」

「……」

「あれつ？ 美・・佐藤さんと由美さん・・・

「あら・・・高木くんー取り調べは？」

「・・・取り調べなんかとつぐの間に終わりましたよ」

「そうつすよ～高木さん今回叫んで犯人びびらせて・・・大変でしたよ犯人が氣を失つて・・・」

あら千葉くん・・・

「アッサーくん、叫んだのかね・・・アハハハハハ」

「もー わつかから笑いすぎよー」

「佐藤さん、由美さん、どうして笑つてゐるんですか？」

「・・・・・絶対言わない」

「・・・・ひどいですよ」

「・・・早く取り調べを終わらせた理由は？」

「……へつ？」

「だつて高木くん、理由がなかつたら「早く吐いて楽になりますよ」で進めるじゃない」「みう

「…へタレつて意味ですか？」

「んーちゃんと理由…意味が違つ

「あつあのー今田は今田ですよね…美和「フハハハハハハハハハハハハハ

ハ」

…由美の声に邪魔された

「由美、静かにして…！」

「あつ…あの…フハハ」

「……高木くん何て？」

次の瞬間…

いきなり彼は私に抱きついてきた

「今日は7日…11月7日です！大切な人がいなくなつてないつて…・・・顔を見せたかつただけです！！！ダメですか？」

温かい・・そうだ彼はここにいる

「高木くん、佐藤くん、付き合つ」とはいいが・・非番の日か・・・
せめて警視庁内ではやめてくれないか」

「めつ日暮警部……」

「・・・30分時間をやる・・佐藤くんも泣いてるようだし・・・
だが帰つたら倍は頑張つてくれよ

「あつありがと、」
「わこむすべ。」

僕らは走った

二人で手を繋ぎ

END

117 (高木 + 佐藤 + 高本 + 千葉) (後書き)

なつなんだこの小説はあああ！――駄文だ！――

青山先生ごめんなさあああい――

千葉くんのセリフいつかいだけ――――――――

高佐愛してる＝＝＝！――（ドサクサ）

松田と高木（松田 佐藤<:= >・高木）（前書き）

コナンの「帰^かり^かる^かの^か」などいろいろなセリフを混ぜて作った（パクつた？）文です

知らない間に長くなつてしましました（汗）

心して読んで下さりませ

私が何故松田くんに興味を持ったのか分からない

「毎年の11月7日[=]321とファックスが送られて来ている…数字の…間違いねえ…」[=]いつは爆弾のカウントダウンだ…奴が動くな
ら今日しかねえぜ…」

「何言つてんのよ…爆弾かなんて確信持てないわよ」

「我は円卓の騎士なり…愚かで狡猾な警官諸君に告ぐで本日正午と
14時に我が戦友の首を弔う面白い花火を打ち上げる…止めたくば
我が元へ来いで72番田の席を空けて待つている」

「何よそれ…」

「今、送られてきたファックスだ」

「どう行くの?」

「わからねえのか?円卓の騎士が72番田の席を空けて待つてゐるつ
て言つてんだ!円盤状で72も席があるつつたら…杯戸町のショ
ッピングモールにある大観覧車しかねーだろ?」

「行かないで…嫌な予感がする…

「勇敢なる警官官よ…君の勇気を称えて褒美を[=]えよつ…もう一つ

のもつと大きな花火の在処のヒントを表示するのは爆発三秒前…健闘を祈る

松田くんは萩原くんの所へ旅立つた

沢山の命と引き換えに…

三年後

「俺は剛球豪打のメジャーリーガー… まあ延長戦の始まりだ… 試合開始の合図は明日正午終了は午後三時… 出来のいいストッパーを用意しても無駄だ… 最後は俺が逆転する… 試合を中止したくば俺の元へ来い… 血塗られたマウンドに貴様ら警察が登るのを鋼のバッター ボックスで待つていい…」

コナンくんのおかげで東都タワーに爆弾が在ることがわかつた

「勇敢なる警察官よ… 君の勇気を称えて褒美を!」えよつ… 試合終了を彩る大きな花火の在処を… 表示するのは爆発三秒前… 健闘を祈る

…

「行かないで… 私を置いてきぼりにしないで…」

「すみません……でも佐藤さんならわかつてくれますよ……」

コナンくんのおかげで爆弾の場所はわかつた

「まつ待て俺じゃないんだ…ホツホラ…よくあるだろ?頭の中で子供の声がしたんだよ…けつ警察を殺せつて…こついや誰でもいいから殺せつて…そつそつせ…だから俺のせいじや…」

こんな奴に…こんな奴に松田くんを…

「うわあああああああ

「こんな奴に!—!

その時高木が佐藤を押し倒した

「なつ何せつてんですか…いついつも佐藤さんが言つてゐるでしょ…

「誇りと使命感を持つて國家と国民に奉仕し、恐れや憎しみをとらわれず、いかなる場合も人権を尊重して公正に警察職務を執行しろ」「つて…・・・そんなんじゃ松田刑事に怒られちゃいますよ…・・・

「

忘れさせて・・・

「バカア！―――忘れさせてよ～～～バカ～」

「ダメですよ忘れちゃ…それが大切な思い出なら忘れちゃダメです
：人は死んだら人の思い出の中でしか生きられないんですから…」

「バイバイ松田くん…でも忘れないからね…」

松田と高木（松田 佐藤<.= >・高木）（後書き）

松田くん

佐藤の心

わしづかみ

575で表すといふな感じ（笑）

秋晴れ（高木×佐藤）

「今日はこつもよつ暖かいわね」「今日の気温は26

昨日と比べれば6 も上がっている

「そうですね…今日は上着なしで十分ですね」

「涉くんなら半袖でもいけるんじや…」

…確かにね

「後で柿、剥くから」

「…・・・僕が剥きます！…」

佐藤は高木を睨み付ける

「私は柿とかのカワムキなつでやるのよ」

「意外ですね」

「言葉に出でないでよ…バカ」

今日は例年に比べれば暖かい…

そして僕たちも変わらずに暖かい

「涉くん愛してる」

「僕もです」

「…今日の夕方予定ある?」

「沢山あるけど…」

「泊まつてこつてください」

わかつた

秋晴れ（高木×佐藤）（後書き）

甘い話を書きたいが経験がないためムリでした

例え・・・（高木 + 佐藤 + 小学生）（前書き）

ちび美和

内容は馬鹿馬鹿しくてスミマセン

例え・・・（高木+佐藤+小学生）

「うわあああああーーー? ?

部屋に入ると一人の女の子・・・いや、女性?が寝ていた

「ん…渉くんお帰り」

「あっあああ・・・」

「なによ」

誰だらりーの子は

「あのあどけら様で?」

「まー?渉くん何言つてこるのよ

それは僕のセリフ

「お前はは?」

部屋に無言が漂う

「とつとつボケてきた?警視庁捜査一課強行犯第3係の佐藤美和子

「

いやーー佐藤さんはもっと身長が高い……でも顔立ちは佐藤さんこそ似ているなあ

「渉くん？」

「…冗談はやめて下さい」

相手は戸惑った顔で聞いてくる

向してゐるのよ」

卷之三

この前美利坚をも訪めた名言葉

泣いて口から出すものじゃない」

ヒトのあてはいる

卷之三

1

「美和子さんですかね？」

な」「な... KID」「でも見える?」

いえ……でも……か鏡を見てください」

二
「

「・・・・・きやああああああああああああああああああああああ

なんだなんだ！？

「どうしたんですか？」

「わっ私、縮んでる…小学生の姿になつてこる…」

「まあ、…ですか

「小学何年くらいで…」

口元に人差し指をのせ、考え込んでる彼女の姿がとてつもなく可愛く微笑んでしまう

「えつとねえ…1年かな」

「ナンくん達と一緒に…」

「私明日から搜查いけない…」

「えつ…」

「家にも帰れない…」

「あ…涉くん今から暇？」

「えつ…あつ暇ですけど…」

「私んちから服取つてきて」

「さすがに大きすぎて入りませんよ」

今の彼女は…例えるなら灰原さんくらいの身長だ

「違うわよ…私が昔着ていた服よ

「でも、僕が着るとは言えませんし…」

「急遽親戚の子がきて服がないから美和子さんに聞いたらあるつて
言つて…だから貸してつて言えれば良いいじゃない」

確かに

「じゃあ僕、貰つてきます」

「頼んだぞー高木涉巡査部長」

「今晚わー高木です…」

少ししてからドアが開いた

「まあ…高木さん? また美和子、酔いつぶれましたか?」

あーーーのお母さんことって僕がくる=美和子さんが酔いつぶれる…か

「いえ…少し用事がありまして…」

「そう…立ち話もあれだから入つて下さい」

「いやつて見ると佐藤ひつじお母さん似なんだなあ……

「どうかしました?」

「こついたえ……そのま……お願いなんですけど……美和子さん……下せ
い……」

「えつ~?」

「あの……美和子さんの着ていた服を少しのあいだ貸して貰ださい
……」

「なんだ……いきだじ美和子には……」

「大丈夫です!許可は取りました!」

次の日僕は帝丹小学校に美和子さんの転校届けを市役所に出しに行
き、一課の田暮警部には本日の事を話した

「せりまた奇妙な……佐藤君には学校が終わったら警視庁にくるよつ
言つておいてくれ」

「了解しました」

「今日から」のクラスのメンバーになる高木美和です宜しくお願いします」

次の日私は帝丹小学校に転校？した

「美和ちゃん美和ちゃん……」ひちだよ……「ナンくんの隣へ」

「あら…あらがとう、歩ちゃん」

「わつ私の名前覚えてくれたの？美和ちゃん覚えるの早いね」

「いっいや…そのあ…」

「ハイハイみなさん高木さんにはアレですが今日はテストdayです

頑張つて全部埋めようね」

「はあー」

いきなりテストかあ…

簡単ね… 13 + 55 = そりゃあ68よねえ

漢字は「はながさく」

を升田に書くのだけど……咲くつて一年だつて
まあ空けて間違えるよりは書いておくほうがいいか

「はい終」～高木さん、範囲は大丈夫でしたか？」

「はい、全部習っています」

そりゃあ28歳（推定）ですから

「ピルルルルル…」こちら警視庁、各局に次ぐ…帝丹小学校に不審者
あり、すぐに処置を「

「「「不審者あ？」」

クラス全員がサケブ

「小林先生、すぐに窓を閉めて下さい」

「高木さん？」

「美和ちゃんどこのくんだよ」

「あつ・・・」

カバンから手錠、警察手帳、警棒を取り出す

「美和ちゃん？」

「私は前のドアを閉めます、元太くん、後ろのドアを閉めてね」

「でも高木はどうすんだよ」

そりやあ「犯人を逮捕しにいくわ」

「美和ちゃん危ないよ…」

「大丈夫よ歩ちゃん、捜査一課の刑事をなめないで」

その時ケータイが鳴り出した

「はい、こちら佐藤…高木くん…？」

電話の相手は相棒の高木

「管理棟一階ね…日暮警部に私が行くつて報告しておいて…うんじやあ」

「美和ちゃん本当にに行くの？」

「…・・・誇りと使命感を持ち国家と国民に奉仕し恐れや憎しみにとらわれず、いかなる場合も人権を尊重して公正に警察職務を執行しろ…それが父の教えよ」

「美和ちゃん警察官じゃないんだから大丈夫よ」

「大丈夫、警視庁捜査一課強行犯担当係をなめないで」

「キタツ…元太くん…鍵閉めて…」

叫ぶ

「ああ…」

「！」の餓鬼んちゅ…どけよ

「あら…28に対しても餓鬼はないんじやない？」

「つ…」

「高木…」

「元太くん…？」

元太が廊下に飛び出してきた

「高木…俺がみんなを守る…早く教室に戻れ」

「…私は高木じゃない…警視庁捜査一課強行犯第三係の佐藤美和子よ」

「…・佐藤刑事？」

「がつ餓鬼が…」

「ウラアアアアアアア」

見事に背負い投げが決まった

「10時36分逮捕します」

不審者のことば終止符を切つた……だか……

「わっ佐藤さん～」

「高木くん遅いわよ」

「あっスマミマセン」

遅れてきた高木は佐藤に一いつてり絞られた

「佐藤刑事」

「あら歩ちゃん」

「帰つちやうの?」

「・・・えつ?」

「もう学校来ないの?」

そうだ、学校の事を忘れていた

「・・んー・・体が戻るまでいるわ」

「・本当?」

「ええ……」の桜の代紋に誓つわ

「絶対だよーー!」

「・・・・つて事で勤務は夜に……」

「はっはっ……」

いつ戻るかはわからないだけひとつ「」の子達と一緒に晒される幸
せ

例え・・・（高木 + 佐藤 + 小学生）（後書き）

話が噛んでなことには見逃して下れい

BAKA (高木 × 佐藤) (前書き)

題名が雑誌つてなんだよ(汗)

BAKA（高木×佐藤）

「思い通りにならなかつた。だから殺してやつた」

犯人は殺された男性の婚約者。

突然婚約解消を迫られて殺したと言つ

「あの人を殺した後、私も死ぬつもりだつた」

・・・ヤンデレか…

「だからといつて人を殺して良いと思っているのですか？」

「・・・・・高木くん、挑発しない…！」

高木のコメントに佐藤が突つ込む

わりと本気だつたのになあ

「佐藤さん、黙つて下さい。友坂さん、貴女は中崎さんのこと、どう思つていたのですか？」

「・・・・・分からなゐわ」

「殺して一自分も死んで、ビリじょつとしていたんですか？」

「罪滅ぼしにはならないわよ」

佐藤が呟く

「罪滅ぼしよ……」

なかなか取り調べは進まない

「一あの人は馬鹿だつたー」

突然友坂が口を開いた

「私と言つ彼女がいながら他の馬鹿女のところに通つていた……だからよ……理由はないわ」

「一……そうですか……」

すると突然佐藤が立ち上がつた

バシーン……！

「甘つたれるんじゃないわよ……」

「さつ…佐藤ひやん！？」

どうも佐藤はまちがいて高木のほつぺたをたたいたようだ

何よ、貴女なんかに私の気持ちが……」

パン！！

「わかるわよアナタの気持ち…大切な人を失いたくなかったから…あの世で一緒に…て思つたのでしょ？」

〔 - - - - - 〕

「貴女はふざけてる」

佐藤は高木の肩を引き寄せた

「私だけ高木くんが別れようって言つてきたり殺したくなると思つ」

：ぼくまだ死にたくないですよ

「でも…」

「何よ！ 黙つてて」

佐藤は犯人を怒鳴り付けた

「でも殺したら会えなくなる」

「…」

「私は殺さない…話し合いつ」

沈黙が漂つ

「私は馬鹿ね…」

「もうう…とんだ馬鹿被疑者ね」

その後

「高木ー お前美和ちゃんと付き合つてゐるもうじやないか

「ひー」

「吐けよ…じ」まで進んだのか

「みつ美和子さんのバカアアアアア」

取り調べさ6時間にも及んだそつだ

END

BAKA (高木 × 佐藤) (後書き)

馬鹿馬鹿小説になってしまった

猫と犬（高木×佐藤）（前書き）

はらへつた（笑）

猫と犬（高木×佐藤）

「今日涉くんち行く」

いきなり美和子さんが行つてきたのは僕が取り調べを始める数分前

「僕、いつ取り調べが終わるかわからないですよ」

「待つてるからー」

「…暇ですよ」

「夕飯作つて待つてるから」

てなことで取り調べを終わらせ家に帰る

「ただいま…なんか焦げ臭さーーー」

「お帰り~」

「美和子さん…何作つてるのですか？」

「…わからない物体」

「…………」

机の上にはこげた卵焼き、魚、切り干し大根みたいな物があった

「見た目より味よ味」

「いただきます」

僕はいつ意識が無くなるのかわからぬいため先に風呂に入つてからご飯にした

「…美和子さん…お米べちゃべちゃです」

「…本当だ…」

「今度焼き方教えましょつか?」

「うん」

卵焼きをたべてみる

「…ある意味すごいです」

外は黒焦げ中は生

「たつ食べれたらいいの…!」

切り干し大根らしいもの…

「…甘いですね(笑)」

「あはは砂糖と塩間違えた」

笑つて「まかさないでください

「ぼく、味噌汁くらい作りましょうか?」

「ビーフシチュー食べられナイんでしょ」

「いいいや…大丈夫ですけど」

「いいもん」

なつ何か気にさわる事言つたかな…

「いや…僕は甘党なので平氣ですよ」

「馬鹿馬鹿…！バカバカバカバカバカバカバカバカバ…」

馬鹿つて…

途中からカバになつてるし

「いやつその…」

「いわゆつせま」

やばい本格的に怒らせちゃつた

「ぼくが悪かつたです」

「…」

「『気にせわる事』ってすみません」

「…馬鹿」

いきなり美和子さんが振り向いて抱きついてきた

「私が馬鹿なの」

「えつ？」

「ひつひつ」

「やつヤキモチ焼いてた」

「？？」

「料理ができる涉くんにヤキモチ焼いてた」

「えつ…」

「…大好き」

…話変わつてない？

「今度涉くんが作つて」

こんな美和子さんが好き

「わかりました！…リクエストは？」

「煮物……」

「わかりました」

end

おまけ

「わー渉くん料理上手ねー」

「やつですか?」

「しかも美味しい」

「…?」

「何?」

「…つまみ食いでですか」

「あつ（笑）早くたべよーー朝から何にも食べてなかつたからお腹
ペツ「ペツ」

強制終了

猫と犬（高木×佐藤）（後書き）

涉くんの煮物食べてみたい！！

あつがひつ（左藤 + 四本）（前書き）

長い黙文に…

あいがとう（佐藤 + 宮本）

「私たちひでじゅうせつひ出合つたつ子」

「警察学校よね…」

「ヤアアアア…！メーン…！」

今日は剣道の時間

「あー面タオル（手拭い）忘れたー」

「由美ー何回田よー」

佐藤の隣で数人の女の子たちが集まっている

「誰が一枚持つてない？」

「私は最初に配られた一枚しかないわよ」

「私もよ」

みんな一枚しか持つてなく、宮本は唸つていた

「…私の使う？」

「えつ？」

佐藤は彼女…宮本に声をかけた

「私は5枚持つてるし」

「…なぜそんなに…」

「私、高校は剣道だつたから」

「いいの?」

「もちろんよ」

「ありがとう…」

「由美との出会いで面タオルね…」

「そうね」

「今日の授業はここまで…整列…姿勢を…」

「ありがとうございました」

「佐藤さん……。」

「なあ!?」

「ありがと!」^{アリガト}「これました……。」

「いいわよ～タオル貸して?」

「あつ洗つて返す……。」

「いいわよ～」

「で……メールアドレスと番号、部屋番を教えてください……。」

「……そんぐりになら教えるわよ」

「?」

「私に面タオルを借りて友達にならうとしたのでしょ?」

「……す」「推理力」

「ありがとう(笑)」

「洗つのは洗つから……私のプライドもあるし……」

「やうね（笑）はい、アドレス」

「部屋番号……387.」

「うん……たまたま美和子で387号」

「私、今日から相部屋で……」

「富本由美さん？」

「うん」

「まあ……よろしくね」

「四〇……」

「……広いわね……」

「まあね、荷物の整理、手伝つわ」

「ありがとう」

「……改めて佐藤美和子です美和子つて呼んで

「私は宮本由美、由美って呼んでね」

「案外ハチャメチャな出会いって感じだつたわねえ」

「確かにね」

「まあ由美の忘れんぼのおかげで仲良くなれたんだし」

「美和子酷いわよ」

「でも由美の裁縫はすごかつたわね」

「ああ……美和子が柔道で柔道着破つたやつ?」

「私が破つた訳じやないわよ」

「わかつてるつて」

「私達、これからも仲良くしましょうね」

「美和子が高木んとこ行かないよう私が邪魔するから」

「…友人の幸せの阻止?」

「正解」

美和子：私達、いつまでも仲良くしようね

由美：いい友達でいよしね

end

あつがい（佐藤 + 田本）（後輩や）

黙文ですみません（笑）

桜舞い（千葉 + 三池 順平）（前書き）

千葉くんは全然でません

苗ちゃん主役です

主に拙いやこと田舎れこじら

桜舞(千葉+三池 順子)

千葉くん…私のこと覚えてる?

あのとき私を叱ってくれた千葉くん

私、今日から警視庁に配属されることになったよ

「今日から交通課でお世話になる三池苗子です…まだまだヒヨウ口だけお願いします…」

4月20日、私は交通課に配属された

「三池ちゃんの担当は由美へお願い…」

「ほえ?」

いかにも寝てしま…って感じの女性

「あなたなに寝てるのよ」

「すみません(汗)つこいつを今まで美和子…刑事課の佐藤、高木、千葉と検問やつて…」

「なんで刑事課が?」

「殺人の…」

「そこからはいい！…言わなくて
分かつたわ…じゃあよろしくね」

「ん、一パトロールいくか」

「フーラレタアアアア？」

「まあセウコウヒヒになるなあ」

「いい」ときいた美和子に教えてやろう」

「あの…振られたってことはフリーですよね」

「まあ…つか貴女だれ？」

「交通課に配属された三池苗子です…コロシクです…！」

「…千葉とクラスメート？」

「ええ… 向けられ忘れてるみたいですけど」

「あの千葉がどうしたの？」

「えつ？」

「まさか、あの千葉が初恋とか？」

「まあ

曲美れんせ黒々しい線描で迫りてくる

ええ！？」んないし子か千葉なんかを？」

「んたしゃなしてす。童顔で口變へし。」

卷之三

新編二
久し心

一週間で10kg

一隅聞前じからぬがくら一田

「はじめまして！－刑事課の佐藤美和子です！」

「けつ 刑事課の刑事さん！？」

「苗子！」この人は警視庁捜査一課強行犯第3係警部補、正真正銘の

「デカよ～んで私の親友で高木の恋人！！」

「由美つ じまー…「らなこと」は言わなこ」の…」

「いいじゃ ない」

「セヒー セーーん田暮警部が呼んでまーす」

「ええー…千葉くんありがとひー…じやあ由美、三池さん、またね」

「バイバイ～」

「千葉くん、」の予見覚えない？」

「交通課の新入りさんですか？」

「ええ」

「千葉あ…報告書あと一〇枚…」

「高木さん…」

「倍にかかるか、 セぬか」

「やつせぬか む…」

嵐は去つていった

「パトロール行きましょっか」

「あつはー」

「桜吹雪ですね…」

「綺麗ね」

「私が転校する日もこんな日でした」

「やつ…今から帝丹小に行こいつか…」

「えつ？」

「チラシ渡せなきゃだめだし」

「あつ佐藤さんだ…

「これねえ美和子の隠し撮り」

「…?」

「渡すのは探偵団の5人だけだ

「探偵団ですか」

「前、千葉と話してた5人」

「ああ……」

「行きましょう」

「はい……」

「変わつてないです」

「そう?」

あのときは送つてくれた桜吹雪

今回は私を受け入れてくれる

千葉くんが私を覚えてなくともわたしが千葉くんに告白する

「入るつか

「はい」

足を踏み入れる

新たな世界への桜のなかに

桜舞ひ（十葉 + 三池 富本）（後書き）

なつなんだこれ！！

意味がわからない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1549y/>

ONE FOR ALL

2011年11月20日04時06分発行